

共産主義への論駁の書、和辻哲郎著『風土』に ポストコロニアルをみる？

岡 林 洋

はじめに

- I. 風土論の共産主義への関係
 - II. サイド『文化と帝国主義』との比較
 - III. 初版『風土』シナの部とポストコロニアル
- む す び

キーワード：和辻哲郎，風土，ポストコロニアル

「シナの国家的勢力が微弱であってシナの国土内に外国の植民
市を作られたということにほかならない」（『風土』初版）

「風土の考察に当時の左翼理論への駁論を混じえていた」

（『風土』新版）

はじめに

昭和三年から十年頃までのことであるが、和辻哲郎は、当時アジアに浸透しつつあった共産主義に対して学問的に対抗し論駁する試みをおこなっていた¹。これまで意外にもそのことは知られなかったし、この論駁が彼の内面に「ある意識」を育てたこともほとんど問題にされていない。この論文でいう「ある意識」とは、今日のポストコロニアルの文脈で議論されている文化意識のことである。本稿は、当時の和辻に植民地化された現実の地域や文学テキストに異文化の接触事例が存在するという視点がすでに備わっていた、と主張しようとするものである。『風土——人間学的考察』（初版昭和十年，新版昭和十八年）はしばしば現代において取り上げられている注目すべきテキストであるが、文化論テキストとして読みをあらたにおこなったという例は、海外の研究者からの断片的指摘があることを除けば、筆者の知る限りまだない²。

本稿の第一のもくろみは、まずこのテキストの読み替えによって和辻の『風土』に新評価をもたらすこと、究極的には、和辻はポストコロニアル文化批判の先駆者であるという

結論を導くことである。本稿の第二のもくろみは、彼のこのような現代的な文化意識が具体的に当時のどんな文化事例を対象として形成されたのかを突きとめることである。『風土』には近代化、西洋化のされ具合の中でこそアジアの文化的な「面白さ」、「珍しさ」、「～らしさ」が見出されるという記述が断片的ながらみられる（主な例は日本と「シナ」）。それらは具体的にどのような文化的事例に基づいて着想されたのか、『風土』の中だけを捜しても当該の対象をつきとめることはできない。もちろんこの思想家の現代的文化意識の構造を明らかにすることは多くの知的苦勞を要する仕事であるが、具体的にアジア今回はシナの近代都市文化のどのような事例に和辻が関心をいだいていたのかを突きとめることは実に骨の折れる作業である。これまで全集の片隅に隠れていた（『風土』執筆以前の）書簡で、1927年渡欧のための船旅の途中の思いつき程度にしかみなされてこなかった記述がある³。しかし和辻がほとんど突然のようになぜこういう都市の文化の見方を思いついたのかは結局今にいたるまで分からずじまいであった。今回、和辻がなぜ急にシナの近代都市文化について発言を始めたのかなどについての謎を解くかもしれない書簡の存在を全集から確認した。その中の一通は谷川徹三に宛た、以前から近代の都市について和辻との意見の交換があったことを示す書簡である。谷川宛てにはその他にも岩波『思想』誌の当時のマルクス主義的風潮を嘆く和辻の書簡が確認されている。

論文のⅠとⅡで、和辻にはサイド流のポストコロニアル文化意識の先駆けが認められるのではないかとの本稿の基本的認識の正当性が論証されるが、その際、共産主義に対する消極的あるいは懐疑的態度が和辻とサイドの間に共通していることが論拠となる。論文のⅠとⅡのパートの後に、後半のパートⅢが続き、先に挙げた海外の研究者のごく限られた、さらなる展開が不可能な言及を和辻の主要著作にしっかりと腰を下ろした論述に移行させる試みがおこなわれる。

Ⅰ. 風土論の共産主義への関係

この論文のはじめにの冒頭、この思想家と共産主義との関係について述べたが、和辻には1920年代末、当時アジアに進出しつつあったロシアの共産主義に対して学問的に反駁をおこなう必要があったという。『風土』の中にはそのことに直接言及している興味深い記述がある⁴。

「このたび新版を出すに当たって第三章の内シナの部を書き改めた。もとの文章は昭和四年、左傾思想の流行していたころに書かれたもので、風土の考察に当時の左翼理論への駁論を混じえていた。今それを洗い落として純粋に風土の考察に引き直したのである。昭和十八年十一月 筆者」

ここでこの引用にある、初版『風土』のシナ記述と共産主義への反駁との関係をめぐって論をさらに展開する前に、あらかじめ次の二点に触れておきたい。まず一点目は、後述され、そして本稿が最も重要なドキュメントであると考えている初版『風土』シナの一節も、この引用にある当時の左傾化傾向に対する和辻の「駁論」の試みのプロセスの中から生まれたと解されるのかどうかという点である。第二点目は、この「駁論」の試みがテキスト内で読者の目にとまったのは昭和十八年『風土』新版成立までの一時期であった⁵。それゆえこの本稿のテーマもまた時期的な限定を受けざるをえない、これをわれわれはどう受けとめるべきであるかという点である。

第一点目 — 本稿が今回和辻のテキストから注目すべきとしている個々の問題、言葉遣い、特殊な文化意識などはみな普通の『風土』のテキストからは孤立し浮き上がっているように見えるものばかりではないだろうか。中でも近代「日本の珍しさ」（初版、新版通じて）、「シナ」の近代植民都市（初版のみ）および、今回取り上げる共産主義への和辻の言及は、みな同様に『風土』の中で奇異な印象を与え、一見風土論の内容として似つかわしくないように思われる。後に触れるシナの近代都市に関する記述などは気候風土とは全く次元を異にし、本稿のテーマにふさわしいまさにポストコロニアルつまり脱植民地主義の文化批評から見られた文化風景と呼ぶべきものである。しかし特にここで注目すべきは共産主義へ和辻が言及している基本姿勢である。これまで和辻の『風土』が執筆された理由の中でも主要なものは一般にハイデッガーの超克と信じられてきたが、つまり時間性に基づく人間存在の規定に対抗する空間性の要請とされてきたが、これを大幅に修正する可能性もはらんでいる。

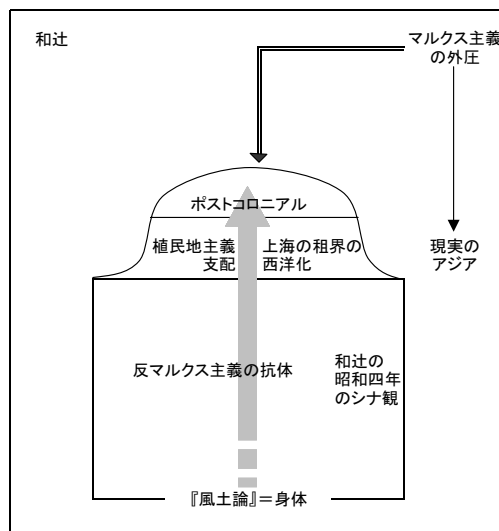
第二点目 — 本稿はたとえ期間の限定された関係であったとしても、いやこの限られた時期（昭和三年～昭和十八年）に共産主義への反駁とポストコロニアルのシナ記述が「対」のように和辻の思考の中に現れたことに論述の焦点を合わせたい。そこで浮かび上がってくるのは、初稿『風土』の特殊な筆遣いに純粋な気候風土論から離れたごつごつとした政治的叙述である。

「かかるシナ人の強みを自分は上海において一層あらわに目撃した。ちょうどロシアのボロジンがシナにおいて勢力の絶頂に達し、蒋介石が獅子のごとく揚子江流域を席卷しつつある時であった。革命軍はすでに上海へ数マイルのところまで迫っており、郊外に近い住宅区域などでは日夜その砲声を聞くことができるという。そこで労働者は革命軍に呼応して同盟罷工を断行した。……共産党は全市にわたって扇動に力をつくし、民衆は今やそれに動かされようとしている。外国人は生命の危険なしにはシナ町に近づけぬ。ただロシア人のみが安全であり大もてである。……続々として諸国の

軍隊が入港し、陸戦隊が上陸する。恐らく租界だけは安全に防げるであろう。」(新版からは削除。初版『風土』昭和十年、第三章のシナの記述より)

初版にはこのように共産主義が進出しつつあったシナの情勢に関する記述も見出され、他方で、後に述べる上海の租界地区や都市全体がイギリスの植民地である香港を別世界として見るような記述もある。当時のヨーロッパで流行していたネオルネッサンス建築様式で建設された上海の租界の様子を近代のシナ文化の風景として生まれ変わらせる現代のポストコロニアルの手法が使われているようにさえ思われる。ではいったい初稿のシナの現実の記述、特に政治情勢記述のごつごつとした感じと、上海の租界や香港に関する記述に見られる思想の鋭くしかも滑らかな切れ味とは、ただ偶然にテキストに混じり合っているだけのことなのか。それともこのような筆遣いは現代のポストコロニアルの系列に属する思想家たちに共通するもので、彼らは決まってかなりごつごつとした筆遣いで特定のイデオロギーを払いのけ、ポストコロニアル文化意識を鮮やかに描きだすのだろうか。

実は和辻以外のポストコロニアルの論者にもこれとよく似た「対」になる二つの立場の統合が問題となっていることが見出される。いやそれどころかこの統合は常に彼らの本質的問題になっているのではないかとまで本稿は考えている。以下筆者はこうした予測のもとにまず図式(次頁参照)上でポストコロニアルと共産主義とがどのような位置および役割関係にあるのかを視覚的によく分かるように描写してみたいと思う。和辻の「対」の問題がその図式の中にどのように組み入れられるか、さらにこの図式を使うことによってこの問題を現代のポストコロニアル文学批評のサイド⁶と共有できるかどうかを検討したい。読者にはまずこの図式の中で和辻の著作を一個の身体のような存在にたとえることをお許しいただきたい。図式上、『風土』は身体で、それに外部から左翼理論(マルクス主義)が侵入しようとしている。この外部からの侵入者と身体とはまったく性格を異にする。『風土』には地域に生きる人の身体、正確には地域を移動する人の身体の役割が与えられている。マルクス主義左翼理論は地域に生き、地域を移動する人の身体にさほど目をやることもなく全世界を一色にしようとする国際的運動の面が強い。それゆえこの身体には、外部からの進入者に対して自己の身体を維持するためにある内部的努力が必要になってくる。ここで生物学の文脈を借りて「抗原」と「抗体」という用語でこの関係を説明すれば、『風土』という生体にとって外部からの「抗原」の侵入に反応して体内に「抗体」と呼ばれる物質が形成されなければならない。この「抗体」には特定の抗原(たとえばマルクス主義など)と特異的に反応してその抗原毒素を中和するなどの作用がある。左翼理論に対しては身体に過敏であるよう、また免疫性を持つように「抗体」は身体各部にうながす。でなければ『風土』という身体は外敵の侵入から身を守ることができないのである。この



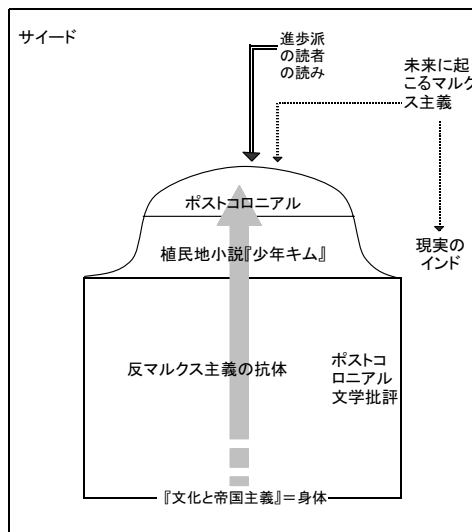
抗体物質が『風土』の身体内部の筋肉や皮下脂肪内部を通ってついに身体が外界と触れ合う皮膚表面部分にまで上昇する流れが生じる。抗体が皮膚表面近くで活動している部分では、皮膚そのものが全体に盛り上がり、一種の「こぶ」のような形になっていて、一見外部からは『風土』の身体のシナの部位に筋肉上部に脂肪がたまったのか、ぜい肉がついてしまったのかにも見える（昭和十八年の新版『風土』では身体からこの脂肪のたまった、ぜい肉の部分がきれいさっぱり取り去られてしまう）。

図式には「こぶ」の上から地域に生きる『風土』身体にマルクス主義がまるでウィールスのように襲いかかろうとチャンスをうかがっているかのように描かれている。さらに「こぶ」の中身を覗いてみると、「こぶ」の低層部では植民地主義が支配し、上海の租界や香港などもヨーロッパ列強の植民地主義の支配する都市テキストとして描かれている。これらの都市テキストは新しく読みなおされることもなく、放置されることによってコロニアルテキストの皮膚は硬直してしまう。しかしこの層の上部にもう一つ層、図式では「ポストコロニアル」と記されている層がある。この層ではその下で起こったようなコロニアルリズムで皮膚が硬直するようなことは起こらず、ここでは「ポストコロニアル」の表示にあるように下層のコロニアルリズムの接頭語「ポスト」が付くような複雑な文化評価がおこなわれる。しかしこの層は「こぶ」の最上層に位置するがゆえにマルクス主義の外圧をもろに受けることになり、さらに身体の下からは反マルクス主義の抗体が絶えず上昇してくる。上からは外圧、下からは抗体、この両側からの圧力に対して、「ポストコロニアル」の層は二つの力の正面衝突をさける一種の緩衝地帯の位置にある。

II. サイド『文化と帝国主義』との比較

次に見るサイドで考えられる図式は基本構造においては、和辻の場合のそれとほとんど変わるところがない。まずここではサイドのポストコロニアル問題の名著『文化と帝国主義』が身体になぞらえられており、和辻の場合に頭上からマルクス主義が襲いかかってくる様子など同じ構造をもっている。また和辻の図式にも見られたような「こぶ」が身体から突起している構造も類似し、「こぶ」の下半分、和辻の場合、上海の租界や香港などのコロニアル都市テキストであったように、サイドの場合も植民地小説キプリングのテキスト『少年キム』ある。二つの図式には全く同じ構造が見られる。特にサイドの図式で興味深いのは、マルクス主義にさらなるニュアンスが付け加わって進歩主義的な読者の読みや批評が議論の対象になることである。

ここでの図式中、『文化と帝国主義』の身体に対する侵入者「進歩派の読み」は、まずこの「こぶ」の外部から『少年キム』を進歩派の期待で読みなおそう、作品を葛藤のない作者から救い出そうとしている。



「さて読者が期待しがちなのは、キムが最後にさどってほしいということである。自分がおこなっているのは、つねに仲間であるとみなしてきた人びとを、侵略者のイギリス人の奴隷にする手助けであるということ、を（中略）わたしたちがつぶさみでとるのは、ふたつの世界が他のことをほんとうには理解しないさまであり、このふたつの世界を行ったり来たりするキムの動揺である。だが平行線はけって交差しない。

キムがうすうす感じている相互誘引が、真の葛藤にいたることはない（中略）キプリングが葛藤に向きなおろうとしないからである。」（『文化と帝国主義』268頁参照）⁷

進歩派の読者の読みは、和辻の図式以来用いられている比喻を使うならば、外部から身体に侵入してくる一種の抗原の役割をはたして、「こぶ」の下の層の植民地テキストの上に毒素をふりまこうとしている。この抗原から発せられる毒素が、植民地主義という大きな物語に対抗するもうひとつの大きな物語、万国共通の進歩史観（さらにはマルクス主義の歴史観）に他ならない。侵入してくる抗原にはサイードの『文化と帝国主義』の内部から抗体が沸き上がってくる。この抗体はむしろ宗主国側の政治支配戦略のもとで見事に描かれている現地の地方色に対して好意的で、ローカルな文化や民族性を保護しようという傾向をもっている。

『文化と帝国主義』の一節で名指しこそ避けられているが、そのバリエーションが読者の進歩主義の読みであり、帝国主義的世界観にとって代わるもの、しかし「当時まだ存在していなかった」イデオロギーが「マルクス主義（的民族解放闘争）」である。

「キプリングの最良の作品を読んだ読者は、彼の作品を、彼自身から救おうと、つねに手をかえ品をかえて試みてきた（中略）キムの植民地政府への奉仕と、彼の仲間たるインド人への忠義立てとの葛藤は、キプリングがそれに向きなおろうとしないから解決できないのではなく、キプリングにとって、そのような葛藤などはなから存在しないがゆえに、解決のしようがなかったのである（中略）想起すべきは、キプリングがいただいていた帝国主義的世界観に待ったをかけるものが、当時は何もなかったことであり（中略）帝国主義の悪を認識していても、いかんせん、帝国主義の代替となるものが当時存在しなかった」（引用は『文化と帝国主義』269～270頁より）

サイードは、植民地小説の読者が当時まだ存在していなかったこのイデオロギーの世界観を持ち出すことを許さないし、イデオロギーの立場からこのキプリングの植民地小説を貶めたり、無視することなどできないと考えている。それでは図式の「こぶ」の最上層「ポストコロニアル」の読みの意識とは一体いかなるものなのか。サイードは図式ではその下部に位置しているコロニアルテキストをこの層では「対位法的に読む」のだという。「極端な宗教性と陰謀うずまく東洋と、近代的方式に自信をもち、原住民に蔓延している神話と信念を蜘蛛の巣を拭うがごとく一蹴したいと願うイギリスとの間」で主人公キムとともに右往左往してみることが対位法的読みの出発点であり、現地人より現地人になりきった少年キムの姿に光をあて、現地の擬態化を演ずる重要な役回りを見つけてやることにこ

の読みは結実する。コロニアリズムのテキストこそがその他では発見できない異文化接触の場なのである。

Ⅲ. 初版『風土』シナの部とポストコロニアル

前にみた和辻の図式の突起部上層「ポストコロニアル」の層で起こっていたことについてさらに考えたい。コロニアル都市テキストを新たに読みかえようという試みについてである。もともと和辻には、文化発生の本質契機はそれが古代のそれであっても近代のそれであっても同じように場所の移動であるという根本思想があって、しかもこれは『古寺巡礼』（初版大正八年、新版昭和二一年）からすでに見出されるものである。

主観主義的な近代美学からの影響を受けて育った者は、知らず知らずのうちに、天才は描く機会を与えられた場所の環境などには左右されずに創造ができると信じ込んでしまっている。画家は西域でも唐でも日本でもどこであってもその独創的天才性において絵が描けるということに疑いをさしはさむ者はほとんどいないのではないか。しかし和辻によれば、同じ天才であっても描く際、彼が身を置いている場所によってことなる絵が描かれる。法隆寺金堂壁画の例で言えば、和辻は西域で壁画を描いた僧が受け入れられる土地、日本という場所が、あの気韻において西域よりも日本の推古仏を尊ぶ心に近い壁画を描かしめたと考えた。これが場所が芸術作品を規定する（「ところによってことなる作品」『風土』）という和辻の文化（芸術）発生の本根思想の出発点なのである⁸。

この和辻の本根思想をあらためて実際の彼がおこなった旅、アジア経由のヨーロッパ旅行に置き換えてみることによって、彼のポストコロニアルの意識がより鮮明になる。彼がヨーロッパという西洋化、近代化の本質的要件が存在する所をめざして文化の場所を移動させてみることによって彼自身の本根思想はより深まったのではないか、そしてほんの一時期ではあるが、ポストコロニアル問題に彼は入り込む。その場合、何が彼の中に新たな文化意識を生むきっかけになったのか。場所の移動がひとつのきっかけになっているのは確かであろう。そして新しい思考実験を場所の移動に身を任せる形でおこなったと言えるのではないだろうか。

確かに和辻が『古寺巡礼』で西域の画僧を受け入れた日本を語った言葉は、『風土』の「日本の珍しさ」の記述の中でより現代的な視点で言いなおされることになる。『古寺巡礼』で「日本人はこの（西域の）天才によって目を開かれ、そうして自己の心を表現して貰ったやうに感じたのであろう」と述べた和辻が『風土』ではさらにこう言うのである。日本の西洋化のされ方がその本場、西洋の場合とは違う。バランスを欠いた過大に強調された西洋化に「日本の珍しさ」を発見することができる。そこで起こったことは何かというと、実際のシナの植民地化された近代都市テキストを事例とすることによって、単なる場

所の移動が、ポストコロニアルの文化意識の先駆となる思考実験へと変貌を遂げたのである。シナの港町を巡る船旅の中で幕を開ける西洋帝国主義勢力によって植民地化されたシナの近代「都市」を文化的に評価する印象記は現代の読者にも驚きに満ちている。その一連の書簡の一通目が谷川徹三に宛てたものである⁹。この船旅の中で実験がはじまる。つぎに引用する谷川宛書簡がその船旅の出発点で、それに対して終着点が『風土』初版のシナの一節であろう。前者に続く数通のシナの印象を綴った妻照子宛の書簡が、ちょうど日本からシナを経てヨーロッパに向かう往路でのポストコロニアル的な意味での成果になる。

「船の中では詳しく手紙を書く気がしませんが、上海という町は君の興味を持ってられる『都市』の一つのタイプとして中々注目すべきところがあると思いました。近代的都市でありつつ、なおその中に支那が浸潤しているその仕方が中々面白いのです。」

和辻のシナの印象記を読むと、1927（昭和二）年に突然新しい文化意識が芽生えたと言ってよいほどの驚きを感じる。一連の書簡には、新たな関心に火がついたとしか理解できないような内容が含まれる。筆者は回り道をすることを覚悟の上で、谷川からの影響があったのではないかという推測をおこなってみたい¹⁰。実際、和辻はそれまでこのような上海の租界の西洋建築などに関して全く関心を示していなかった。谷川の方はすでに近代の都市についての発言をおこなっていたことが和辻の書簡から読み取れる。ある意味この領域で和辻より多くの知識と関心をもっていたことが十分に予想される。この問題では谷川はいわばパイオニア的存在であると言ってよいであろう。シナの都市に新しい読みがあることを和辻に気づかせるきっかけを作ったのではないだろうか（ただし現在までに確認ができていない谷川の出版済みの都市論のうち最も古いものでさえ昭和十二年を待たなければならない。筆者がわざわざ「回り道をすることを覚悟の上で」と断ったのはこの点があるからである。筆者はここでの叙述を、執筆の時期が前後するのを覚悟の上で、谷川の持論をベースにして今一度読みなおしてみたい）。

和辻は妻の照子に宛ててこう書いている（1927年2月25日）。

「所謂名所が見られなくても、香港という町だけ見れば沢山だと思っている（中略）上海とか香港とかいう所は（中略）同じ用に西洋風になっていても東京や大阪とはなりぐあいが違うので、支那というものの特殊性が日本のそれとの比較上、よほどよく解る（中略）全然欧風の建築にどこか支那が加わっている。その加わり方が上海と大

分違う」

この和辻の印象記はおおむね谷川宛の一通目書簡に披瀝されている上海という都市の印象とほとんど変わるところがない。例の書簡当時の谷川の都市コンセプトの発展的形態として谷川の『日本人のこころ』(昭和十三年)を位置づけた上で、その中から二つのテーマを取り出し、和辻のシナ記を読み込むための新たな基盤づくりに役立ててみたい。印象記の一つは近代的風景としての都市に、もう一つは西洋化の中のシナのものに捧げられているが、実はほとんどがみな谷川の言葉でいいかえることができるというよいほどである。先に前者、都市印象に関しては、谷川の外国人に対しておこなった講演「新しい日本文化——外国人のために」がその背景説明になるだろう—そこでは「洋風建築」が「都市美観の主要な構成者」であるばかりでなく「都市そのものの実質」とさえなっており、「現代の日本の文化と社会生活との外観がどんなにヨーロッパ風やアメリカ風を示しているが、その内実には古い日本風が固く残っている」と書かれている。次に後者、西洋化の中のシナのなものに関していうと、同じように谷川の「民族と伝統との問題」が多少掘り下げてくれる—「日本的なものの否定が却って日本的なものに忠実である。なぜなら日本的なものは自然の状態に放置しても存在するので、つまりこれを如何に否定しようとしても否定することはできない」と。

本稿のメインテーマ——和辻の印象記にポストコロニアルの新しい文化意識が読み取れる——に直結する試みは、あまりにも「唐突な」彼のシナ記の言葉に頼らざるを得ないというのでは少々こころもとない。ならばここで谷川が存在を少し無理をしてでももちだしてみるのも良いであろう。このテーマに関して同時代人、谷川との意見の交流があったという事実の指摘は、和辻のシナ都市印象記の唐突な感じをぬぐうことができるかもしれない。和辻には後の『風土』の記述以外にこの分野の発展的叙述はほとんど見られないのである。

この旅を通した思考実験の復路の最後、終着駅が、初版『風土』のシナの部の記述である(改訂版の正式の本文からは削除され、付録に加えられる)。筆者にポストコロニアルの先駆的意識ではないかと思わせた書簡のシナの都市についての記述は、この著作の中で和辻の思想体系に組み入れられる。冒頭でこう述べられている。

「自分の瞥見したシナは、上海、香港、シンガポアなどのシナである。それらは最近一世紀足らずの間に欧米の資本主義が作り上げた欧米人の町であって、シナ固有の町ではない。しかもその『シナ固有でない』町においてちょうど『シナ固有なもの』が最もあらわに現れている。一步を進めて言えばシナ固有でないこの種の国際都市がシ

ナの国土にシナの町として出現したというちょうどそのことが最も著しくシナのなのである。

人は近代の大都市が著しく国際的に化したという（中略）ベルリンは著しくフランス化しアメリカ化した。パリの趣味を支配しているのは外国人である。……」

ここではっきりと、世界の各大都市で起きている国際化（アジアでいえば西洋化）と、シナの同様に国際都市ではあるものの上海、香港で起きている植民地化とが明確に区別され記述される。一方は谷川も指摘する都市の国際化の文脈と考えてよく、もう一方は谷川の考えがついに及ばなかった先駆的ポストコロニアル文化意識で語られる和辻の文脈である。シナの部では確かに谷川のそれとよく似た文脈で大都市が著しく国際化したことが語られている——「しかしながらかかる国際化はいわば我々が日本風住宅のうちに椅子テーブルを置き油絵を飾るというほどのことに過ぎない。いかに調度を変えても、日本風の家はあくまでも日本風の家である」。しかし和辻は、谷川の都市の国際主義と、シナの記述においてたもとを分かち、まさにポストコロニアルの意識を全面に押し出す。

「しかるにシナの国際的都市においては、シナ人の町が国際化したのではない。それは初めから外国人の町である。町の形貌がシナとかかわりなき外国風であるばかりでなく、町を管理するのは外国人であり、町を防衛するのは外国の軍隊である」。

ここで和辻がシナの国際都市を読み解いている様は、即彼の先駆的なポストコロニアル文化意識の基本構造をみごとに浮かび上がらせているように思われる。筆者は、本論を締め括るに際して、彼の同じく『風土』初版の言葉をポストコロニアルの文化意識成立の各段階に振り分けてみてその意識構造を明確化してみたい。この読みの第一段階、現地（植民地）に、あるいはコロニアルテキストに、政治的武力的反抗を求めない——「シナ人は武力をもって反抗することは断念している。政治的権力を回復することもまじめには望めない」。その第二段階、この読みは植民地の芸術様式の国粹化をめざさない——「都市や建築の様式にシナの国粹をよみがえらせよう、外国風の町をシナ化しようなどに興味をもたない」。第三段階がこの読みは植民地化をまきかえす術を知っている点——「しかもシナ人はこれら外国人の町を実質上シナ人のものとしてしまっている」。以上から、和辻がこのアジア、ヨーロッパへの旅を通じておこなった思考の実験において、往路ではほぼ歩調を合わせていた谷川の国際主義的日本文化論と、復路においては完全に一線を画すようになることが分かる。和辻は一時的にせよ確実にポストコロニアルの文化意識を発見していたと結論づけることができよう。

む す び

ひとつ言い残したことがある。それは、和辻がマルクスの語っていることと当時の左傾化の動きとを分離して考えていたということである。彼は、マルクス自身の思想には尊敬すべき点は少なくないと明言し、その一方で岩波の『思想』誌周辺にたむろしているあさはかなマルキストたち、有象無象には強烈な怒りを覚えると語る。この件で聞き役を努めていたのが谷川徹三であり、岩波書店側には彼の嫌う風潮を許すことに抗議する書簡まで送っている。

初版『風土』の反左傾思想の立場とシナの都市に関するいわゆるポストコロニアルの文化意識との関係、それが一時的な「対」関係に終わってしまうことについてもひとこと述べておこう。和辻は反左傾思想がその記述の中に混じり込んでいたからという理由で、ポストコロニアルな「シナ」記述を、新版から切除してしまっている。この昭和十八年に取られた和辻自身の処置で、筆者の見るところ『風土』は残念ながらバランスを欠くいびつな著作になってしまった。「シナ」ともう一つのポストコロニアルな記述「日本の珍しさ」は、考え様によっては『風土』の二枚看板になる可能性があり、後者だけ残したのでは新版がすっかり色あせて見えてしまう。それは片肺飛行をする旅客機のようなものであり、そのような中途半端な旅には筆者でなくとも多くの人々が参加したくないと思うだろう。このような旅客機に乗ったのでは、あの和辻による先駆的ポストコロニアル意識発見の旅も、きっと成果半減ということになるだろう。もし「日本の珍しさ」を新版に残すなら「シナ」もちゃんと本文に残しておくべきだった。

しかしこの一件に関してもさすが和辻だと筆者に思わせることがあって、それについて最後に述べておきたい。昭和十八年に国内政治が一層急速に変化、右へ右へと大きな流れが学問の世界にも押し寄せたに違いないこの頃に下した判断が『風土』初版の「シナ」記述の削除であることを深く考えてみようとも思う。和辻は学問的業績がそのような右への大波に、もまれることを嫌い、ポストコロニアルなシナの記述に含まれる（右に偏った？）政治的とも受け取られる記述を取り去った、と。もし仮にそのように考えてみれば、彼の当時下した一時的緊急避難的な本文からの「シナ」の削除は極めて賢明な処置であったとも考えられるのである。

注

- 1 和辻哲郎（1889－1960）／この時期は『風土』初版が執筆されはじめた昭和三年から、初版が出版された昭和十年まで。『風土』において特にこの論文で取り上げようとしているシナに関する記述は、昭和四年頃から執筆されはじめている。
- 2 Leslie Pincus: *Authenticating Culture in Imperial Japan*, University of California Press, 1996. /「断片的」というのは、この著作が九鬼周造研究であり、和辻への（「日本の珍しさ」についての）言及は九鬼を補完する形にとどまる意味。筆者には過去に断片的な論考および発表がある。岡林『美楽』2003年丸善出版／同志社大学学術奨励研究会発表2003年11月29日、岡林「あなたの色に染められたい 和辻哲郎のポストコロニアル的文化意識」於、同志社大学。
- 3 1927年（昭和二年）に和辻は渡欧。その道中に見聞や感想を日記風に綴った書簡が残っている（全集第25巻に収録）。ポストコロニアルの先駆けとなる和辻のシナ文化らしさ、上海と香港での各文化らしさに関する日記の記述が存在していることは、前掲書『美楽』ですでに明らかにしている。
- 4 昭和十八年『風土』新版を出すに際しての筆者の言葉。
- 5 この出発点の取り方にはまた当然反論が予想される。この論文で筆者はこれほどまでに重要な視点を含む一節だと考えても、この初版では見かけるシナの記述はその後、昭和十八年に版を改める際には、すべてなくなってしま（以後、本文末の付録として残される）。和辻は、現代の文化論に通じるものを『風土』から捨て去ってしまったかのようである。彼は結局この種の文化意識について無自覚だったからなのか。わずか初版（昭和三年に執筆開始、十年に出版）から昭和十八年の新版までの十五年間しか、本稿の後の章で述べるシナの一節は『風土』の正式な本論として認められてはいない。
- 6 エドワード・サイード（Eduard W. Said 1935-2003）
- 7 引用は『文化と帝国主義』のテキスト中に引かれている（268頁）エドモンド・ウィルソンの評論文から。ウィルソンは、キプリング（1865-1936）の植民地主義小説『少年キム』を読んだある種の読者の見解を代表する形で『キム』の批評を書いたとされている。（本文中には原著“Culture and Imperialism”1993、の邦訳『文化と帝国主義』（大橋洋一訳）の1からの頁数が引用される）
- 8 「法隆寺壁画に日本人の痕跡を認める！」の一節は、後の『風土』のしかも第四章の芸術論「ところによってことなる芸術」の思想を含めて和辻の根本思想をすでに言い表している。『古寺巡礼』には、西域の僧（アジャンタの壁画を描いた僧）が法隆寺金堂壁画を描いたにちがいないというかなり有力な説があったと紹介され、それに和辻が反論を加えるという形で自説が展開されている。すなわち「この（金堂壁画の）画の気韻には西域画と全然異なるものがある（中略）日本においてこれをかいた人は外国人であったかも知れない。外国人であるならば、それは唐において容れられず、日本にその適応する地を見出した人であろう」。そして彼はこう結論づける。「この画はやはりその画かれた土地と結びつけて考へるほかないのではなからうか（中略）この画の（外国人）作者もまた推古仏を愛する人々の素朴な心を尚び、その心に投ずることを心がけたのである」と。
- 9 1927（昭和二）年2月22日 上海 白山丸にて（谷川徹三宛てに書かれた）〔絵はがき〕。
- 10 和辻のいうように、谷川は以前から「都市」について興味をもっており、彼の「都市」の一つのタイプに上海のような町も入る。しかし谷川に和辻が書簡を送った昭和二年二月以前に、活字として谷川が都市論を公にしていた形跡は今のところ発見できていない。むしろ筆者は谷川に都市論が存在することをこのやりとりから約十年遅れてようやく昭和十三年に発行された『日本人のこころ』（岩波書店）の論文から知った。したがって事実関係はこうかもしれない。つまりまとまった思索にはなりきれなかった谷川の都市イメージが、昭和二年二月以前に谷川から和辻にもたらされ、後者のシナの印象記（昭和二年の書簡）と『風土』（昭和十年）でポストコロニアルを予感させるような都市の読みになった。むしろそれから二、三年して谷川が和辻から影響を受けて都市論と日本文化論の二論文を書いた、と。しかし論成立の年代とは別の問題として谷川が昭和十三年の段階で、数年前にすでに公にされていた和辻のポストコロニアル文化意識をどれほど汲み取れていたかというそれは全くない。昭和二年の谷川の「都市」に関する見解はおそらくは十年後の出版時に公にされた論と基本的には同じものと考えてよいのではないか。筆者は本文では近代都市について発言しただしたのは谷川であり、近代都市の国際性と日本との関係などに関してもより強い関心をいだいていたという見解のもとに論述をおこなっている。